



# ティー・ブレイク

NO. 88

## 昭和時代

私の郷里の房州（千葉県南部）は、枇杷（びわ）の産地である。近所の家や学校には枇杷の木があり、ちょっと取ってはそれを食べた思い出がある。要するに、野イチゴならぬ野枇杷があったわけで、これは他の産地でも同じではないかと思い、山梨や福島出身の方々に「そちらの県では、道端に野生の桃が生っているのではないか」と尋ねたところ、大いに笑われたことがある。どうやらこれは、私の郷里に特有の現象なのであろう。

東京では、枇杷はちょっとした高級品である。値段の割には果実の部分が少なく、ある意味では贅沢品でもある。ちょっとやそつとでは、口にできない。

あの頃、道端で毎日のように食べた枇杷は一体なんだったのだろうか。汁をこぼしながら枇杷を食べるとするのは、贅沢な食べ方なのである。

枇杷の果汁は鉄分が多く、それが付着したときには服を褐色に汚してしまう。これは桃の果汁でも同様なのであるが、いずれにしても当時の洗剤ではこれが落ちなかったので、親たちはこれらを性質の悪い果物として位置付ける一方で、子供たちは行儀の悪い食べ方をして服を汚しては、よく怒られたものであった。

今の洗剤ならば、枇杷の汁程度の汚れなどは簡単に落ちる。ところが、それをやった子供はきつく叱られる。そう、昔よりは遥かに優秀になった洗剤のおかげで、確かにみんな服はきれいである。であるから、逆に、ちょっとした汚れでも、余計に目立つ。であるから、ちょっとした汚れ程度のもので、怒られる。

しかしながら、子供らは、実は、服を汚したから叱られるのではない。汚した服をきれいにする手間がかかるから、親にとってその時間が惜しいから、怒られるのである。要するに、皆が皆、余裕が無い。あの頃よりも豊かになったはずなのに、幸せというには程遠い。

よくよく思い起こしてみると、あの当時は、本当にモノが無かった。今となっては信じられないことではあるが、家に来た封筒も、給食費を学校に持っていく小袋や何かとして再利用されていたこともあった。であるから、服の数もあまり無かったような気がするが、そうした服を汚したところで、それが落とせるものであるならば、それほどきつく叱られはしなかった。その作業に時間がかかるものであっても、困った顔をされるぐらいで済んだ。みんな、心のどこかに余裕があり、独特の陽気さがあった。

今になって思い起こしてみれば、昭和時代というのは、貧しかったが豊かな時代であった。

(正)